



Title	19 世紀イングランドにおける友愛組合の医療補助機能
Author(s)	芝谷, 琉希
Citation	大阪大学経済学. 2024, 73(4), p. 53-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94749
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2023年度 学生懸賞論文受賞作 優秀賞要旨】

19 世紀イングランドにおける友愛組合の医療補助機能

芝谷琉希

本稿の課題は、19 世紀イングランドにおいて友愛組合が提供した医療補助の実態を明らかにすることである。友愛組合が、経済的な余裕がない労働者に対して、医師による診療の機会を提供していたことはよく知られているものの、提供される医療の経済的側面にはあまり関心が向けられてこなかった。これは、友愛組合が労働組合との連続性という文脈で研究されてきたことによるもので、この点に研究が集中したことで、友愛組合の持つ医療補助機能に関する研究はあまり進まなかった。

そこで本稿では、同時代学術雑誌を用いて、友愛組合の医療補助を数量的・制度的な側面から分析することを試みた。具体的には、『ロンドン統計学会誌』と、医学雑誌『ランセット』という二つの同時代学術雑誌から、友愛組合の

規模、医師との契約方法、医療補助による健康効果を検討した。

その結果、1830 年代以降から台頭した連携型友愛組合が 1870 年代頃には工業地帯を中心にイングランド全域に普及し、医師による診療体制を充実させ、労働者の健康維持のための環境構築を広範囲に行っていたことを明らかにした。また、連携型友愛組合に所属する組合員の年齢別死亡率は、イングランド・ウェールズ全体の年齢別死亡率よりも低く、健康状態は平均よりも良かったと考えられる。こうした分析結果は、友愛組合による健康維持のための環境構築が、労働者の間で一般的なものとなり、労働者の健康に対して一定程度の効果を上げていたことを示すものである。